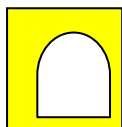


日吉台地下壕保存の会会報



第117号

日吉台地下壕保存の会



来年度は館山で開催

2014年8月16日～18日まで戦争遺跡保存全国シンポジウムが明治大学生田キャンパスで開催されました。登戸研究所保存の会・川崎中原戦災空襲を記録する会・日吉台地下壕保存の会を中心に実行委員会を結成し、それ他にも多くの人の協力で無事に終わることが出来ました。



また、神奈川県・川崎市及びその教育委員会が、多くの新聞社が後援してくれたおかげで多数の参加者があった。最近後援に少し慎重な行政が多い中、名前を連ねてくれたことに感謝している。

大会の内容も丹羽宇一郎氏の講演「アジアの平和と日中関係のこれから」、そして分科会は24本の発表と充実していた。

今回のひとつの特徴は戦跡保存に行政の協力が必要であるが「観光資源としての戦跡」と「戦争の実相としての戦跡」と行政と保存団体の間にずれが生じた戦跡があった。安全管理のためにと戦跡を壊したり、イベント会社に運営を委ねるところもあった。これからの課題として考えなくてはいけない。その一つのやり方として来年の開催地である館山が注目される。来年は館山で一緒に学びましょう。

目次

巻頭言	1p
報告 第18回戦争遺跡保存全国ネットシンポジウム 神奈川県川崎大会 全体(谷藤基夫)	2p
記念講演「アジアの平和と日中関係のこれから」 丹羽宇一郎氏(谷藤基夫)	3～5p
分科会発表 喜田美登里・山田淑子・小山信雄	5p～6p
分科会報告 佐藤宗達・小山信雄・上野美代子・遠藤美幸	6p～9p
フィールドワーク報告 佐藤宗達・山田譲・大西章	10p～12p
お知らせ 日吉フェスタ・慶應義塾と戦争Ⅱ	12p
バスツアー「東京大空襲と第五福竜丸事件を考える」	13p
連載 日吉第一校舎ノート(5)(阿久沢武史)	14～15p
連載 地下壕設備アレコレ【その12】(山田譲)	15p
活動の記録	16p

第18回戦争遺跡保存全国シンポジウム

戦後69年目の夏、2014年8月16日(土)17日(日)両日に^{わた}り明治大学生田キャンパスにおいて神奈川県川崎大会が行われました。このシンポジウムは戦争遺跡保存全国ネットワークと、登戸研究所保存の会、日吉台地下壕保存の会が主要な団体として構成されるシンポジウム神奈川県川崎大会実行委員会が主催し、明治大学平和教育登戸研究所資料館の共催、神奈川県、川崎市はじめマスコミ各社、多くの団体の後援で行われたものです。これまで大学を会場とするシンポジウムは多くありましたが、大学との共催は今回が初めてです。

大会初日の16日午前中は生田キャンパス内の登戸研究所資料館見学が行われ、午後から開会式が行われました。会は川崎の市民混声合唱団「いちばん星」の川崎大空襲をうたった美しくも胸迫る歌声で始まり、主催者代表挨拶とともに川崎市長、多摩区長など歓迎のご挨拶をいただきました。そののち丹羽宇一郎前中国大使の中国問題についての記念講演が行われました。著名な演者と時局の関心の高い演題とあって理工学部の6百人収容大階段教室は2階席まで



川崎市民混声合唱団いちばん星

聴衆でいっぱいでした(講演概要別項)。続いて基調報告として十菱駿武戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表から全国の戦争遺跡の自治体による史跡・文化財指定の状況(全国で216件;但し日吉台地下壕は未指定)や破壊・消滅の危機に瀕する戦争遺跡の現状の報告がありました。現地報告として日吉台地下壕保存の会は大西章が航空本部地下壕の破壊状況について、また登戸研究所保存の会から保存運動の広がり現状について報告されました。

終了後の交流会は戦前・戦中に陸軍登戸研究所の職員・研究員も使ったという歴史のある多摩川沿いの川魚料亭「柏屋」で行われ、和食バイキングで舌鼓を打ち、世界的に知られる腹話術人形「ゴローちゃん」の芸に笑いに包まれながら、全国の戦争遺跡保存を目指す仲間とともに楽しい交流のひと時を過ごしました。



閉会集会

二日目の分科会は三つの分科会に分かれ、一つの分科会で8~9本の報告があり、全国各地の保存団体から保存運動の進捗状況について詳しい報告とそれをめぐる質疑が行われました。本会からは喜田美登里、山田淑子会員により「戦争遺跡を間近で見学できない時のガイドについて」報告が行われました。終了後の閉会集会では各分科会の報告とともに、湯川秀樹、朝永振一郎両ノーベル賞受賞者も勤務された歴史がありながら河川改修で消滅の危機にある戦時中秘密の電波兵器研究施設、静岡県島田市の「第二海軍技術廠牛尾

実験所跡」の保存を求める要望決議、2004年の刊行予定から未だ刊行されていない文化庁の「近代遺跡調査報告書」の早急な刊行と各自治体においては昨年1月の文化庁通知に基づいて文化庁報告書の刊行を待つことなく、独自に調査、保存、史跡、文化財指定を進めることを求める大会アピールが満場一致で採択されました。

三日目18日のフィールドワークはB日吉台地下壕(日吉駅)C陸軍東部62部隊(歩兵101連隊)(宮崎台駅)D東京大空襲と第五福竜丸(東京駅)E東京多摩地域の戦争遺跡(調布飛行場等)4か所に分かれて見学を行いました。どの見学会も印象深い見学会として見学の方々の記憶にとどまっていたようです。

(文責運営委員谷藤基夫)

報告

記念講演「アジアの平和と日中関係のこれから」

丹羽宇一郎氏(前中国大使・前伊藤忠会長)を聞いて

運営委員 谷藤基夫

講演当日の暑さにもかかわらず明治大学生田キャンパス理工学部校舎にある600人収容の大教室は聴衆でほぼいっぱいであった。講師の前中国大使、前伊藤忠会長である丹羽宇一郎氏はそのご経歴からいっても黒塗り、運転手付きの高級車で来られてもおかしくない方であるが、小田急線など一般交通機関で会場に来られたということである。伊藤忠会長の時からそうだったと伺う。本当の経済人というものはそうあらねばならないといった人がいるが、そのえらぶらない行動様式を拝見しても庶民性と親しみが感じられ、只々頭が下がる思いである。しかし一旦演壇に立たれ平和について語りだされると、堂々とされ、訥々とした語り口ではあるが、説得力を持って切々と聴衆に迫ってくる思いがする。話されている内容は実に重い。時代状況から言ってもそうである。集団的自衛権行使容認が閣議決定された直後である。ヘイトスピーチを声高に叫ぶ狂信的な人々の行動すら想定された。氏は覚悟をもって日中首脳との平和への努力の必要性を我々に語ってくださったと思う。「日中の平和がアジアの平和につながる。両国は等身大の姿を見せ合い、理解しあい、お互い努力することが必要」と翌日の東京新聞にあった。一点だけ中国はインドとの国境紛争以外戦争をしていないというくだりがあったが、実は中国は朝鮮戦争のみならず、ベトナムとも(中越戦争)、旧ソ連とも国境紛争(戦争)を起こし、戦死者をたくさん出している。日本は戦後戦死者を一人も出していない。だからこそ平和憲法を持ち、戦後69年間他国との戦争の歴史を持たない日本には中国に対し、平和を語る資格があるのだと思う。日中友好を説かれる氏の講演にひたすら共感をもって聴き入っていた。



丹羽宇一郎氏

【講演概要】8月15日終戦記念日で昔から変わらないことが一つある。それはこの暑さ、これだけは変わらない。

他は大きく変わった。8月9日の長崎平和祈念式典で被爆者代表は集団的自衛権行使容認を「暴挙」と訴えた。あれは戦争を知る者の「魂の叫び」だ。すごい迫力だった。他にも「特定秘密保護法」「武器輸出三原則撤廃」「中国脅威論の過剰な報道」と大きく変わってきた。一方「沈黙の螺旋」が気になる。インテリ層、有識者らが社会的孤立を避けるために優勢な勢力に対し、意見を控え、沈黙することである。沈黙が螺旋的に沈黙を呼び、それが日本の知的衰退をもたらす。有識者はもっと勇気を出して自分の意見を言うべきだ。これができないのなら、また「いつか来た道」を辿る危険性が高い。

山形の農民詩人であった「皇国の母」は戦後「恨みの詩」をまとめ詩集を出した。「なぜ息子は国に命を捧げなければならなかったのか」「息子の肉体と魂はどこへ行ってしまったのか」と山形弁で切々と綴った。こうした声が

日本全国にいたるところにあったが、そういう声は高齢化とともに徐々に数が減り、最近では戦争被害者の声が忘れられつつある。

こうした風化を食い止めなければ日本は「いつか来た道」を辿ることになる。非合理的な恨みややっかみが一部の狂信的な者たちを動かし、戦争が繰り返される。ウクライナ、イスラエル、中国の南シナ海と紛争の火種は世界中にある。

先日テレビを見ていたら8月15日は何の日か知らないと回答した若者が52%もいた。戦った相手は誰かという問いには画面に「えっ、知らない。誰?」と女子高生が友人と話す場面が映し出された。これが戦後69年目の現実だ。私は「戦争の反省の継承は難しい」とつ

くづく思った。

今の若者には生まれた時から平和は空気のようにそこにある。しかしこれは憲法9条のおかげだ。平和は決してただではない。それは先人の「血」と「汗」と「歴史の時間」が紡ぎだしたものだ。将来の平和のために若い人たちに戦争の歴史を伝えなければならない。世界で平和を享受している国がどれだけあるのか？平和は我々が作っていくものだ。1972年田中角栄首相の時に「日中国交正常化」が行われた。これは田中さんの英断だった。田中さん以降23人の総理が誕生した。みんな日中関係を大切にし、戦争しないように努力してきた。中には苦々しく思っていた首相もいただろう。しかし個人的な感情で突っ走ることをした人は一人もいなかった。安倍さんの個人的な感情だけでこの積み重ねてきた「平和」を壊していいのか。

日中両国首脳やるべきことは自ずと決ってくる。それはおたがいの国益のために、かつ平和な友好関係を継続させるために努力することだ。安倍、習両首脳の時に壊してよいわけではない。丹羽さんは中国びいきだと指摘されることがあるが、決してそうではない。私は日本びいきなのだ。日本の国益を第一に考えている。この会場の中に日本の国益より、中国の国益を優先して考える人は一人もいないと思う。そういうものだ。

日中の平和と安定は日中国交正常化の時、日中共同声明の4つの協定で規定されている。①武器の不使用②領土の尊重③漁業資源④国民の交流である。「4つの協定」を両国は確認せよと言いたい。

しかし両国の首脳は顔も合わせない。極めて恥ずかしい。「世界の笑いもの」と言ってもいい。珍事だ。まるで子供の喧嘩である。日中が平和と友好を維持しなかったらアジア全体が安定しない。中国の経済的な影響力はそれだけ大きくなった。「日中国交正常化」のころは、中国経済はとるに足らない経済状態だったが、今の中国は違う。万一にも中国経済が破綻することがあれば、世界の経済が破綻する。そうならないように米国はじめ世界中が中国経済を支えるだろう。私は中国経済が破綻することは絶対にないと確信する。日本は中国がこれだけ大きくなっていることを直視すべきである。1945年8月15日以降日本はこの国とも戦争はしていない。中国はインドと戦争をしたことはあったが、大きな戦争はしていない。日本の「憲法9条」が両国の発展に繋がった。

中国は習近平国家主席が長老たちとの会議を継続中だ。中国共産党に対する国民の信頼が揺らぎ始めた今、「経済で日本に勝った」ことで、支持を回復し、さらに党中央につながる人たちの汚職を「可視化し、処罰する」ことで、国民のために頑張っている姿を演出し、それによって盤石の体制を築きたいと考えているが、それを長老たちが認めるのか、綱引きの真っ最中だ。8月いっぱい会議は続く予定だ。

日中関係には日本が考えなければならない課題が二つある。一つは領土主権問題、もう一つは靖国参拝問題。領土問題については1996年から「存在しない」と言ってきた。尖閣問題では日本は譲歩すべきではないと考える。もし譲歩してしまえば「北方領土問題」「竹島問題」でもロシア、韓国から譲歩を迫られることになるのは必至だ。

靖国問題に関しては、靖国神社は1978年にA級戦犯の合祀が判明した。この神社を公式参拝するということは、日本として先の大戦を反省しないということになり、国際社会から「侵略・侵入」を認めないのかと指摘され、ポツダム宣言、サンフランシスコ条約への挑戦ということになる。事実天皇陛下は合祀発覚以降未だに参拝していない。ここに参拝するということは歴史修正主義と国際社会から受け取られる。よく「戦勝国による一方的な裁判だ。したがって無効だ。」という人がいるが、そもそもすべての軍事裁判は戦勝国によって裁かれるわけで、戦敗国に発言権はない。嫌だったら負ける戦争をしなければいいだけだ。

戦後レジームからの脱却とは、こうした戦後秩序の否定であり、オバマ大統領の心情は「戦後レジームから脱却するな」ということだ。だから「失望」したのだ。私は靖国以外に、たとえば米国のアーリントン墓地のような誰でも参拝できる追悼施設を作すべきだと思う。安倍首相がどうしても靖国に参拝したいのであれば個人としていけばいい。

公人として行くべきではない。

歴史認識ということがしばしば言われるが、一つの事実に対する見方は国によって違うのは当然だ。たとえば安重根は韓国では英雄だが、日本では伊藤博文を暗殺した暗殺者だ。このように見方が国によって違うのは当たり前で靖国に関しても見方が違うのは当たり前のことだ。公人ならそういうことも考えて行動すべきだ。

日本と中国の両国民同士に相互不信が高まっている。日本人も中国人も相手の国に行ったこともないのに悪口を言う。とにかく行ってみればいい。行ってみれば認識は変わるはずだ。中国の黒竜江省では7000もの満蒙開拓団の遺骨が発見された。これを弔って埋葬し、その後も管理しているのは中国政府だ。なぜ日本の内閣総理大臣はここへ行って手を合わせないのだ。

また広州省の南京や吉林省のハルババレーでは旧日本の関東軍が遺棄した化学兵器が発見されることがある。日本政府は条約でその処理を行っているが、そのたびに「戦争は終わっていない」と感じる。

中国では今年の春、9月に「抗日戦争勝利の日」と12月に「南京大虐殺の日」を制定し、国民の祝日にした。日本の反感を買うだけのことを何故するのか。日中両国で犠牲者の「追悼記念日」のようなものを設け、両国で「過ちを繰り返さない日」にすればいいのにとと思う。夫婦関係と同じようにお互いが努力しなければ「平和」な日中関係は作れない。

分科会発表

戦争遺跡を間近で見学できない時のガイドについて〈日吉台地下壕のガイド事例の紹介〉

報告者：喜田美登里、山田淑子、小山信雄（日吉台地下壕保存の会）

(1) はじめに

日吉台地下壕保存の会は主要な活動のひとつとして慶應義塾日吉キャンパスの戦争遺跡の見学案内を行ってきました。アジア太平洋戦争末期に海軍が使った建物と地下施設のコースを2時間半ほどで案内していますが、キャンパス南側の寄宿舍下に広がる連合艦隊司令部地下壕は見学コースの中心です。

今年2月末に地下壕内暗号室天井部から少量の剥落があり、安全点検のために6月までの4ヶ月間地下壕は入坑できなくなりました。

見学会の中心になっている地下壕の入坑中止は、2011年3月11日の東日本大震災後の安全点検や地下壕入口付近の土砂崩れ等、何度もありましたがほとんどの場合見学会を中止してきました。

見学会コースの中で、「地下壕」の暗闇は見学者に強いメッセージを伝えていると感じます。しかし、残された「トンネル」を見ただけでは日吉の戦争遺跡の持っている内容を伝えるのに十分ではないとして、私たちは地上部の案内を重要視し、空襲や地域史の紹介など、日頃からガイドの工夫をしては来ました。

今回はいつ再開できるかもわからない状況が続き、今までのやり方を再検討する必要に迫られましたが、私たちガイドは見学会を中止にしないで地上部のみの見学を工夫しながら行う事にしました。

2月末からの見学会申込み団体に地上部のみの見学会を提案して6月末までに8団体を案内しました。中止・延期となった見学会は6回ありました。戦争遺跡の保存運動にとって見学会の果たす役割は大きいのですが、遺跡の劣化や所有関係などで間近に見学できない場合も多いと思います。そのようなガイド事例として、この4ヶ月間の私たちの取組を報告します。



山田淑子・喜田美登里・小山信雄さん

(2) 地下壕抜きの見学会の工夫

○ 地上の見学ポイントの見直し

フェンス越しに見ていた「耐弾式堅穴抗」「弥生時代住居址」を間近に見学する。

人事局地下壕出入口の見学（入坑不可）

地下に施設がある場所の上部でガイドを行うようにした。

○ ガイダンス・各ポイントでの説明を工夫する

可能な場合はガイダンスに教室を借りる。その場合は視聴覚機器を活用する。（プロジェクターで資料の投影）

できるだけ多く写真を示し、イメージを持てるようにした

日吉キャンパス・地下壕の地形、位置がわかるような説明

(3) 課題と成果

○ いつもは見るだけで済むものを言葉で伝える難しさ。説明が長すぎないようにしながら、わかりやすく話すこと。「地下壕が見たい」人はなかなか参加しない。地下壕内で感じる実感の重要さを再認識。説明でイメージするものが世代で違う。

ポイントや紹介ビデオの作成が必要。

○ 話す内容を検討することで、何を伝えたいかを改めて考える機会になった。戦争遺跡という場があるだけで伝わるものがある。これまでの蓄積や掘り起しの成果が、新しいメンバーにも共有される機会になった。

戦争遺跡に入れず、または壊された状況で、どんな見学会が可能か？安全を優先しつつ、失われたり入れなかったりする戦争遺跡でどんなガイドを行い、「戦争遺跡」に何を語らせるか？各地での経験・工夫を伺い、交流を深めていきたいと思います。

☆ 連合艦隊司令部地下壕は慶應義塾が超音波などを使った非破壊検査で地下壕内の劣化調査を行った結果、1カ所コンクリートと地層の間に間隙が見つかり、その部分を通行禁止にしました。建設から70年経過した地下壕の劣化を心配していましたが、今回の調査でコンクリート強度は現在の建築基準と比べても十分に合格する値を示したそうです。

分科会報告**第1分科会（保存運動の現状と課題）に出席して****運営委員 佐藤宗達**

第1分科会は8件の報告がなされ、どれも聞き応えのあるものばかりですが特に印象に残ったのを書いておきます。

（1）京都飛行場跡地とウトロ土地問題。京都飛行場を建設するため1,300人に及ぶ朝鮮人労働者が集められたという。そして戦後帰国もままならず今なお苦難を強いられている現状が報告された。また8月10日開催予定の第6回久御山平和展で配布予定のレジメが台風接近のため中止となり当日会場で配られた。その中で墜落したB29の操縦士のレシーバーと飛行帽が京都市民によって保管されてきたが、1995年操縦士の夫人キャロラインさんに返還されました。夫人は一縷の生存の望みを捨てきれず、遺品を箱に入れ鍵をかけて50年間誰にも見せず保管してきた。レシーバーと飛行帽が帰って来た時、彼女は泣き叫び、箱の鍵をこわし、ようやく夫の死を認めたというエピソードも紹介されております。

（2）東京湾要塞猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡国史跡指定へ。一昨年の大会主催のバスツアーで千代ヶ崎砲台跡を急ぎ足で見学したことがあるので丁寧な解説で全容が掴めました。かなり整備がすすんでおります（因みにモリソン号事件、ここ千代ヶ崎から発砲した由）。なお猿島には未だ行けてないので是非近々覗いてみたい。（猿島公園専門ガイド協会のガイド案内を利用できるようだ。有料）

（3）旧陸軍桶川飛行学校について。熊谷陸軍飛行学校桶川分教場は昭和12年開校、ほかの兵科から航空兵を希望してきた召集下士官や少年飛行兵、学徒出陣の特別操縦見習士官な

どが教育を受けた。初心者用の複葉機、通称「赤とんぼ」から高等訓練機などの訓練を受け、卒業後は外の飛行学校で実戦機の訓練に入ったようだ。昭和20年になると特攻隊の訓練基地として使用され、4月5日、陸軍初の練習機による特攻となる振武第79特別攻撃隊12名が知覧基地に向けて出発している。使用機は「九九式高等練習機」複座なので12機のうち6機に整備兵または整備員が同乗、岐阜県・各務原飛行場、山口県・小月飛行場を経由したが、整備兵・整備員は小月で分かれた。練習機による特攻は聞いておりましたが今回の報告でその一端を知る事ができました。なお分教場跡地は旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会が譲り受け、土、日、祝日には公開して写真展示及び解説がおこなわれており、元整備員も参加されており当時のお話を聞くことができるそうです。

(4) 筑波海軍航空隊の保存活動と今後の課題。「永遠のO」のロケ地であったことから注目されるようになった。現存する旧司令部庁舎はほとんど変わっていない、堂々とした建物です。それは戦後、跡地が学校そして、病院として使われていたため手を加えていないからでしょう。ここに昭和9年霞ヶ浦海軍航空隊・友部分遣隊が開隊、昭和13年筑波海軍航空隊として独立、司令部庁舎も昭和13年建設。そして地下戦闘指揮所が造られている(昭和20年2月完成)。この跡地は筑波海軍航空隊プロジェクト実行委員会・支援する会が維持・管理をしているが発足してまだ1年、まだまだ一般に知られてなく、元々解体予定の庁舎の存続、一方、地下戦闘指揮所、無蓋掩体壕は私有地にあり、司令部庁舎と合わせた維持・管理が急務となっています。是非とも見学したい場所です。(特に地下戦闘指揮所の現状を見たいものです)。初めての参加でしたが収穫の多い分科会でした。

第3分科会(平和博物館と次世代への継承)に参加して

運営委員 小山信雄

8件のレポートが報告され、それぞれの会の皆さまの地道な活動状況実態を知ることができました。初めて何うお話も多く、何れも大変勉強になることばかりで、これからの活動に大きな参考になりました。以下、感想などを幾つか述べさせていただきます。

●「平和の文化」を学ぶ館山のピースツーリズム 池田恵美子さん(安房文化遺産フォーラム) いわゆる「逆さ地図」を大陸からの視点で眺めた事はありませんが、館山が太平洋の遙か彼方の米国からの、本土の最前線に位置している事に気づいたことは、正に「目から鱗」でした。明治中期よりアワビ漁師たちが太平洋を渡り、缶詰め等新しい食文化を浸透させたことや、開戦と同時に日系人強制収容所に収容され、コロネット作戦の情報収集にも協力させられたことなど、太平洋を挟んだ日本と米国の「歴史の現実」に触れる事ができました。また、「軍需産業はなくなる」という言葉はとても重く受け止めました。嘗ての東京湾要塞の拠点であり、里見八犬伝の歴史的史跡も抱える「館山まるごと博物館」は、是非一度訪れたいと思います。

●「戦争の記憶」－伝えたい平和の大切さ－ 大西進さん(河内の戦争遺跡を語る会)

「八尾市」という一つの地方自治体が、自らの地域と歴史を基に作り上げた、69年前の戦争の実相を記録する史書「戦争の記憶」を題材として、平和の大切さについて報告されました。戦闘機のイラストや防空兵器などの記述の削除が多かった点など、表現には大変ご苦労が多かったようですが、寧ろ、書かれていない事(今回参考映像として補充された事)にこそ、真実が眠っていると感じました。戦没者の実態(若者60%、最後の2年で75%、栄養失調70%)には、改めて愕然とし、実相を知ることの重要さ強く感じます。

●豊川海軍工廠跡地の公園化と資料館建設 伊藤泰正さん(豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会) 昭和11年の海軍工廠建設に始まり、最盛期には従業員5万6千人以上等を抱え、昭和18年の豊川市誕生のルーツとなった跡地の公園化と、資料館建設に向けた基本方針、整備内容・スケジュール等について報告がありました。海軍の弾丸の70%が生産され、8月7日の大空襲による被害を免れた一部の建物や、着弾痕を残す施設の保存・活用に向けた過去18年間に亘る活動内容が紹介されました。「18年間言い続けることは力になるも

の」という言葉に感銘し、「ガイドの話に具体性があるか、自分に何が出来るかが重要」を充分認識しなくてはと感じました。

●戦争遺跡を間近で見学できない時のガイドについて (日吉台地下壕のガイド事例の紹介)
喜田美登里さん 山田淑子さん (日吉台地下壕保存の会)

本年2月に起きた地下壕内天井部からの小さな剥落から、4か月間入坑出来なくなった期間行った「地下壕に入れない時期」の見学会の実態と、問題点・今後の検討課題について報告されました。「戦争遺跡というモノ」に何を語らせるかは、ガイドを行う上でとても重要な事と認識していますが、「モノ」として有限。出来る限り長期の保存を継続して行く事は前提としながら、如何に「見学者」に実相を伝えて行けるのかを考え、工夫を重ねて行きたいと思えます。「語る人の力量が試される」ということでもあります。

●第24師団第1野戦病院本部壕の調査を終えて 津多則光さん (沖縄平和ネットワーク)

沖縄には「ひめゆり学徒隊」の他にもいくつかの学徒隊があることは聞いていましたが、今回「白梅学徒隊」に関する大変貴重なお話が聴けました。戦後長らく世間から忘れ去られていた「第1野戦病院壕」が、直径10cm程度の二つの穴の発見から始まったことに感動を覚えました。当時の野戦病院での看護の実態は想像を絶するような状況で、白梅学徒達の勤務も、初めは3交代勤務が、2交代、最後はなし崩し的に交代不可能になってゆく有様など、具体的な状況を知ることが出来ました。観光資源として注目してゆきたい「観光課」と、戦争体験を真実



第3分科会発表

として伝えて行きたい「教育委員会」との方向性の違いについて述べられましたが、保存と活用を考える上での、とても大きな課題です。「白梅看護隊を通して、沖縄戦でのまだ分からないこと、何が行われて来たのかを解明して行きたい」と言われたように、戦争の実相はまだまだ解明されていないことが山積していると感じます。

●感想：今回の一番の収穫は、戦争遺跡の状況や周辺の環境、保存に関する意見はさまざまですが、それぞれの会のみなさまが行政等の関係者と、地道に粘り強く活動を継続されている現状を知ることが出来た事です。根気よく継続することが重要だと改めて感じました。また、「若い人達は正しい歴史(特に近現代史)を教わっていると言えるのか？」との意見には、正にその通りと思います。戦争遺跡初心者ガイドの自分としては、特に痛感いたします。

第3分科会の感想

運営委員 上野美代子

分科会発表のそれぞれの報告を聞いて、いまさらながら日本にはたくさんの戦争遺跡があり、その遺跡を保存し、戦争と平和を次世代に伝えること。これがとても大切なことですが、とても難しい課題ということがひしひしと伝わってきました。

安房文化遺産フォーラムの「平和の文化」を学ぶ館山、登戸研究所保存の会の取り組み、豊川海軍工廠跡地の公園化と資料館建設への道のり、NPO中帰連平和記念館の中国に残った捕虜となった兵隊の話、沖縄での野戦病院本部壕の調査のこと、などなど。

お話を聞いていて、保存のためには、本当に地道に根気よく運動をしていくことが大事ななあ、と感じました。

また、ただ保存するだけでなく、戦争遺跡から戦争と平和をいかに次世代に語り継いでいくか？そのためには、戦争体験者の話を聞き、その方たちの気持ちを受け継ぎ、ガイドを養成していくことが、これからの課題になっていくとお話に身が引きしめる気がしました。

第3分科会（平和博物館と次世代への継承）

「NPO・中帰連平和記念館」（報告者 芹沢昇雄氏）の報告を聞いて

運営委員 遠藤美幸

「NPO・中帰連平和記念館」（埼玉県川越市）は、一般的にいう戦争遺跡とは少し趣が異なるかもしれません。報告者の芹沢さんは、報告の冒頭で、「この中帰連平和記念館では日本軍の『加害』にこだわった活動をしています」と述べています。この記念館は、戦時下の中国大陸での加害行為を証言してきた元日本人戦犯たちによる「中国帰還者連絡会」（中帰連と略称）を支援し、2002年に解散した中帰連の関連資料の散逸を防ぐために2006年11月に発足しました。中帰連関係資料以外に教育学、社会学、歴史学などの様々な研究者の蔵書約5万冊を所蔵しています。最近では自衛隊の内部文書を使った著作で知られた軍事評論家の藤井治夫さん（2012年3月死去）の資料が寄贈されました。昨年の4月から、私は記念館の一室で、数名の仲間とともに「藤井資料」の整理分類の手伝いをしています。

さて、そもそも中国帰還者連絡会（1957年発足）をつくった元日本人戦犯とはどのような人たちなのでしょう？日本の敗戦後、60万人以上といわれる日本軍将兵がソ連に抑留されました。いわゆる「シベリア抑留」です。1950年7月、そのシベリアに抑留中の日本人捕虜から約1000名が選ばれ、中国に「戦犯」として移送されました。彼らが着いた先は中国・遼寧省の炭鉱の街・撫順でした（他にも日本人戦犯を収容した管理所は山西省太原にもあり、140名の戦犯が収容）。日本兵らはこの『撫順戦犯管理所』で、戦犯として6年間を過ごすことになります。芹沢さんは当初の『管理所』での様子を次のように述べています。「日本兵らははじめのうちは『オレたちがなぜ戦犯なんだ！』と管理所の職員に反抗しました。一方で、中国人職員は日本人への恨みを乗り越えて人権を尊重し人道的な待遇をしました。その職員の中には日中戦争の中で家族を虐殺された被害者も少なくなかったのです。」このような中国の「寛大な」戦犯政策の中で、次第に元戦犯たちは中国側の被害者の苦しみを深く知り、猛省し、ついには自らの加害行為を告白するようになります（これを「認罪」と呼びます）。元戦犯たちは自分たちのこうした心の変化を「鬼から人間へ戻された」と表現しています。1956年の夏、瀋陽と太原で戦犯裁判が行われ、一人の死刑や無期懲役者も出さずに元日本兵は全員釈放され帰国の途に着きました。

帰国した翌年（1957年）、彼らは中帰連を結成して、反戦平和と日中友好のための活動を行います。中でも中帰連の注目すべき活動は、自らの加害行為の証言活動です。芹沢さんは、中帰連の人たちの加害証言の事例をいくつか紹介されましたが、どれも聞くに耐えない残酷なものです。例えば、元軍医の湯浅謙さんは、「野戦病院では生体解剖はどこでもやっていた。731部隊だけでない」と話し、金子安次さんは、中国人女性に対する輪姦や強姦などの自らの体験を告白しました。

過去の戦争が私たちに遺し伝えてきたものとはいったい何でしょうか？

中帰連平和記念館は、元日本兵らが中国人に行った加害の実態を証言する中で、被害者の苦しみをどのように受け入れ、加害者と被害者の関係性をどのようにつくり、乗り越え和解に至ったのか、「人間の心の変化の軌跡（奇跡？）」を記録した場所であるともいえましょう。過去の戦争が人間の心に遺したものの、死ぬまで誰にも話せない心の闇を抱えながら多くの元将兵は生きてきたのかもしれません。本当の戦争の実態を後世の人々に伝え遺す貴重な資料を保管している中帰連平和記念館は、戦争とは何か、まさに加害の実態を吐露した人間の「心の戦争遺跡」であると思いました。

フィールドワーク報告

B コース.日吉台地下壕見学会を案内して

運営委員 佐藤宗達

8月18日(月) 午前の部 9時から、参加者36名 午後の部 13時から、参加者36名
 ガイド：中沢、長谷川、茂呂、岡本、喜田、上野、谷藤、佐藤、小山、遠藤(敬称略)。
 コースは定例会通り、日吉駅に集合。来往舎横でガイダンス(茂呂)、第一校舎(小山)、地下壕(長谷川、谷藤、喜田、佐藤、遠藤)、チャペル(岡本)、艦政本部(佐藤)、堅穴坑(佐藤)、寄宿舍(喜田)、まとめ(茂呂)、とほぼ2時間半で廻れた。午前の部：全国ネットの参加者が多く熱心に聴いてくれた。(その割には書籍購入が少なかった・・・既に会場で購入済み?) 午後の部：一般の方が多く定例会の雰囲気でした。「問題点」①参加者リストを慶應に提出するため締切日を設けなければならず、その後の申し込み者はお断りする事になった。また小学4年生以下は入れないので年齢確認をする必要があり連絡窓口の喜田さんにかなりの負担がかかってしまいました。②参加費の振り込み確認が全部できてなく、未確認者には「参加費いただけますか」、「振込したよ」と自己申告になってしまった。振込み証書を持参した方々もおられ、お互い気まずい場面でした(不眠不休で振込み確認された亀岡さん喜田さんご苦労様でした) ③一番の心配事は当日参加。新聞記事を見てこられた方が数名こられた。お断りせざるを得ませんでした。これまたお互い気まずい雰囲気。「事前予約などどこにも書いてない」と云われても・・・新聞記事になる場合には殆どが連絡先を書いてくれますが、記者に念押ししておきたい。暑い中、参加してくれた多くの方々に喜んでいただけたようなので幸いでした。

C コース「陸軍東部62部隊と溝の口演習場のあとを探る」に参加して

熱意あふれる大泉さんの見学ガイド

運営委員 山田 譲

大泉雄彦さんのガイドの補佐役として参加した私でしたが、まずはじめにおどろかされたのは、大泉さんの用意した資料の量でした。朝、集合時刻の30分前に、田園都市線宮崎台駅の改札口を出て大泉さんに会うと、待っていたのは資料のホッチキスとじ作業でした。前日に明大の教室で、資料のホッチキスとじを手伝っていたのですが、それ以外に3束のホッチキスとじをこれからやるというのです。聞けば朝の3時まで、がんばって印刷をしていたという話です。

私の他にガイド補佐が2人いて、駅改札口前の床に新聞紙を広げて、その上にプリントをならべ、大急ぎで資料作りです。そのうちに参加者が来はじめて受付けをしたり、近くにとまっているバスと連絡に行ったり、何が何だかわからないうちに、なんとか準備がととのい、いざ出発となりました。私はこの膨大な資料の量に、まず圧倒されてしまいました。これは目に見える気迫です。見学する所は、お化け灯籠や泉福寺など、一部の知られたもの以外は、ほとんどが地元の人でなければ絶対！わからない、住宅地の中に点在する埋もれた戦争遺跡ばかりです。中でもびっくりだったのが、「馬房跡」です。東部62部隊というのは、近衛師団歩兵第101連隊の通称名です。溝の口一帯に広大な演習場があり、敗色濃いアジア太平洋戦争末期に新兵教育をして戦地に兵隊を送り出していた所です。その中にあったいくつかの建物が、今もなんとか残っているわけです。その中のひとつが、細長い木造カワラぶき平屋の「馬房」とよばれる馬小屋(馬長屋?)です。この細長い建物に、戦後、何家族もの人たちが、建



フィールドワーク 泉福寺



木造カワラぶき平屋の「馬房」とよばれる馬小屋跡

物を分割する形で住みついたようです。そのために、屋根は続いているけれど、途中で一部が改築されたり、壁がちがっていたりしているフシギな「長屋」です。建物が長すぎて写真にうまく写りませんが、想像力で見てください（無理か?）。
 ともかく大泉さんが宮崎中学に勤めていた時に、社会科の授業で生徒たちと一緒に、地元の人にしかわからない現存する戦争遺跡をひとつひとつ掘り

起してきたんだということが、ものすごくわかるフィールドワークでした。

最後に行ったのは、国学院大学たまプラーザキャンパスの中の、400mの長大な射撃場跡であるグラウンドでした。ここでも大泉さんは炎天下で熱弁。これはヤバイと私はノコノコ、シャシャリ出てドクターストップ。冷房のきいたバス車内に「避難誘導」して、話の続きをお聞きし、見学会は無事終了。総勢23人の参加者の中には、大泉さんの同僚の若い社会科教師や、平和問題に関心が強く母親をつれてきた娘さんなど若い人も5人参加。運動の未来につながる芽を育てる場にもなったとおもいます。

なお、乗車したバスは、天ぷら油の廃油で動くエコバスで、ゴマ油のにおいのするバイオ燃料車でした。運転手さんは、大泉さんの指示する細い裏道を見事なハンドルさばきで運転し切り、たいへんご苦労さまでした。すべては大泉さんの熱意と人徳で、無事に丸くおさまったフィールドワークでした。大泉さん、ありがとうございました。

D コース「東京大空襲(69年前)と第五福竜丸(ビキニ被爆から60年)を考える」に参加して 運営委員 大西章

川口重雄さんの案内で東京都慰霊堂、東京大空襲・戦災資料センター、第五福竜丸展示館、築地魚市場・マグロ塚プレートを体験者の方や学芸員の講話など聞き見学し、はとバスかと思わせるような川口さんのバス車内での軽妙なガイドを聞きながらの充実した8時間の見学会でした。

まず50pを超える膨大なプリントを渡されるところから始まり、東京慰霊堂へ。中にはいると中央に巨大な「震災遭難者霊位」、「戦災殉難者霊位」と書かれた位牌がある。関東大震災で亡くなられた方と空襲で亡くなられた方の慰霊が一緒に並んでいる。一つは天災で、もう一つは人災である。地震の多い日本では天災は避けられないが、人災は人が起こしたことで二度と起きないように祈念する慰霊を一緒にすることに違和感を覚えた。大震災の慰霊に、大空襲の慰霊をつけたしたことになる。あの空襲は地震と同じ天災なのかと思ってしまう。国から空襲で亡くなられた方への補償はない。一億総特攻と国民全員を戦争に参加させ、亡くなられた方への国からの償いの言葉はまだない。自然災害で亡くなられた方と一緒に天災なのかと思ってしまう。外に出ると「関東大震災であやまった策動と流言蜚語のため六千余名にのぼる朝鮮人が尊い生命を奪われ・・・日本人の誠意と献身が、日本と朝鮮両民族の永遠の親善の力となる・・・」と朝鮮人犠牲者追悼碑があった。当時、韓国



東京都慰霊堂

併合で日本人と同等とみなされていたはずなのに、堂の中には朝鮮人は慰霊されないのか、人災であるから外に追碑したのか不明であるがこんなところにも民族差別が垣間見えた。

東京大空襲・戦災資料センターは民間のセンターである。美濃部知事の時代に計画され、都が資料収集を始め、石原都政で計画が中止になった。収集した資料段ボール490箱は早乙女勝元氏の自宅に送りつけられたことからこのセンターが始まる。民間戦災者には目も向けない国の姿勢がよくみえる。1945年3月10日当時6歳であった方の体験談が聞けた。防空壕に逃げ、そして母親に背負われ、墨田区から東京駅まで行く途中で見たことは今でも思い出す。60歳になるまでは一言も話をしなかった。その体験を思い出し、引き込まれそうになる恐怖で話をする事が出来なかったが、ようやく体験談を出来るようになり、戦争の悲惨さを伝えていくことの活動をしている。



読売新聞 1954年3月21日(夕刊)

第五福竜丸展示館にはいると木造の船体が眼前に横たわる。被曝し、名前を変え、老朽化して捨てられ、記憶の外に追いやられそうになったが、今歴史の証人として、被曝された大石又七氏とともに語っている。被曝を受けたことを隠され、差別されてきた現実、3.11以降とよく似ている。第五福竜丸が1954年3月1日被曝、14日に焼津港に帰港し、「死の灰」による被曝が発覚した1週間後に新聞はもう原子力の平和利用の記事を載せている。もう一度第五福竜丸の歴史を学ぶことによって、3.11以降の自然を人を被曝させる可能性が大きい原発問題の解決の方向が見えてくるような気がする。

お知らせ

〈 日吉でツナガル 想いハジケル 〉 ヒヨシフェスタ開催

11月1日(土) 12時～17時 慶應義塾大学日吉キャンパス記念館～来往舎前

フェスタ内容：ステージ(ダンス、合唱等) ブース(展示・飲食・体験等)

慶應義塾大学の地域活性ボランティア団体・ヒヨシエイジ主催の『ヒヨシフェスタ』が今年も開催されます。日吉台地下壕保存の会の展示と書籍販売のブースにお立ち寄りください。「ぶら～り キャンパスウォーク」として地下壕のガイドによる日吉キャンパスの散歩も実施します。(予定 13時～・14時～ 2回予定 参加希望の方は保存の会テント前に来てください。

☆この日は地下壕内部には入りません)

慶應義塾と戦争Ⅱ 残されたモノ、ことば、人々

日時 2014年10月7日～31日

会場 慶應義塾大学三田キャンパス内 (無料)

① 慶應義塾図書館展示室 9時～18時20分(土16時50分) 日祝閉館

② 慶應義塾大学アート・スペース 10時～17時 土日祝閉館

展示 ○慶應義塾出身の戦没者、復員者、関係者の姿や心情を伝える実物資料
○慶應義塾出身の特攻隊員に関する資料
○戦時下の福沢諭吉批判関係資料など

東京の戦争遺跡バスツアーのお知らせ

東京大空襲と第五福竜丸事件を考える

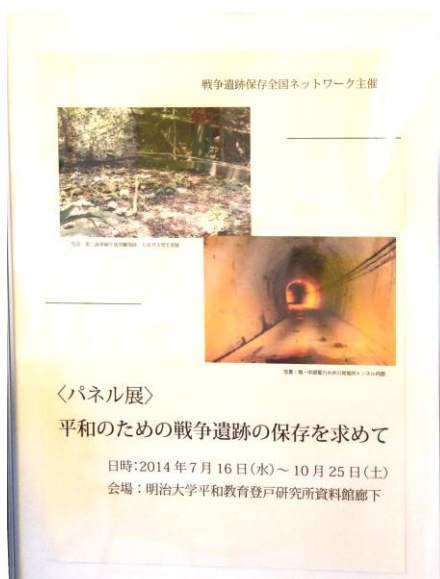
3.11 で我々は原発で自然と人を被曝させました。1954 年米国は水爆で太平洋と第五福竜丸を被爆させました。日本は南京・重慶を大空襲しました。米国は東京を大空襲しました。

まだこの問題は解決していません。被爆した自然・人、被災した人々の声を記憶を消し去り、また同じことを繰り返そうとしています。

今一度、戦争の本質を、放射能の本質を体験者の声を聞きながら考え、これから自然とともに、世界の人々とともに平和に生きていくことの大切さを一緒に学びませんか。(お昼は築地の場外市場で各自自由にとります)



日 時	10月26日(日) 8:00~17:30(予定)
見学地	日吉—第五福竜丸展示館(講話、館内見学)—築地マグロ塚プレート(場外市場で昼食)—東京大空襲・戦災資料センター(体験者の講話、館内見学)—被災墓石見学—東京都慰霊堂—日吉
集合場所	慶應義塾日吉守衛所前 8:00
案 内	川口 重雄さん
参加費	4,500 円(交通費・保険代・資料代・センター協力費など)
募集締切	10月20日(ただし先着25名で締め切ります)
申込方法	氏名と電話番号を明記して、葉書か FAX 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 亀岡敦子 T&F045-561-2758



まだやっています

平和のための戦争遺跡の保存を求めて
明治大学平和教育登戸研究所資料館
10月25日(土)まで

日吉第一校舎ノート（5） 設計者 網戸武夫

運営委員 阿久沢武史

昭和8年(1933)11月、小泉信三が塾長に就任した。以降、日吉建設は小泉の主導のもとで進められていくことになる。前塾長の林毅陸が掲げた「理想的新学園」建設のグランドデザインに基づき、小泉は資金募集のために「全国各地を文字通り東奔西走」(『慶應義塾百年史』中巻(後))することになる。日吉台の広大な敷地に新キャンパスを建設するというこの一大事業に際し、義塾がその全体設計を依頼したのは、曾禰中條建築事務所であった。

曾禰中條建築事務所は、明治41年(1908)に曾禰達蔵と中條精一郎によって開設された近代日本を代表する建築事務所であり、東京海上ビルディングや郵船ビルディングなどのオフィスビルを中心に数多くの近代的な建築を残した。慶應義塾との関わりは深く、早く明治45年(1912)には創立50年を記念するゴシック様式の図書館を三田山上に竣工、続く大正4年(1915)の三田大講堂、大正15年(1926)の塾監局、昭和4年(1929)の医学部の予防医学校舎、昭和7年(1932)の病院別館、昭和12年(1937)の三田第一校舎と、義塾はこの時期のほとんどすべての記念碑的な建築の設計をゆだねている。

当時の日本を代表するこの建築事務所が、新しいキャンパスのシンボルとなるべき校舎の設計担当者に選んだのは、まだ無名の建築家にすぎなかった網戸武夫であった。

網戸は明治38年(1905)に韓国仁川に生まれた。生家は輸入家具や建築関係資材などの販売業を営み、関東大震災の年に受験のために上京。大正14年(1925)に新設されたばかりの横浜高等工業学校(現横浜国立大学理工学部)の建築学科に第一期生として入学、ここで生涯の師となる建築家中村順平に学び、昭和3年(1928)、卒業と同時に曾禰中條建築事務所に入った。後に独立し、戦後GHQの家族用住宅(ワシントンハイツ)や関連施設の設計を皮切りに、数多くの集合住宅や企業ビルを設計、他に水の江瀧子や石原裕次郎・長嶋茂雄などの著名人の住宅も次々に手掛け、戦後日本の近代住宅の設計に大きな足跡を残すことになる。

最晩年の網戸が自らの生涯を回想した『建築・経験とモラル』(住まいの図書館出版局、1999年)には、日吉開設と第一校舎設計の経緯が詳細に記録されている。これは、第一校舎の歴史と記憶を紐解く上で、非常に貴重な資料と言える。

私が、建築という形象にデビューした作品は、処女のような清浄無垢の永い助走の果てに厳しく燃えた、慶應義塾大学の日吉台全体計画ということになります。初々しい28歳(1933年)の、しかし汗と野心にたぎった、泥まみれの作品です。

網戸は1999年10月に94歳で逝去した。生涯に設計した作品数は、住宅建築225、公共建築216の計441作を数え、第一校舎はその記念すべき第1号の作品ということになる。彼が横浜高等工業学校の建築学科を卒業して曾禰中條建築事務所に入ったのが昭和3年(1928)、ここで日吉台の新校舎に関わる仕事のほとんどすべてを任せられ、6年後の昭和9年(1934)に完成させた。網戸はこの回想記の中で、「誰の手も借りずに、私一人の担当」になり、「造形的な面ばかりでなく、仕様書も構造も、積算も、それから材料の選択から現場監督まで、全部自分から進んで関与しました」と言う。むろん師である中條精一郎の指示や指導を仰ぎながらであったようだが、建築の規模・質ともに、新進の建築家にとっては、まさに「汗と野心にたぎった、泥まみれ」の、緊張と試行錯誤と多忙をきわめる大きな仕事であった。

日吉台の新キャンパスの全体計画の構想には、中條の「壮大なパルチー(根本方策)」が大きく投影していたと網戸は述べる。

中條精一郎は、この丘の上に50年あるいは100年先の未来を夢みた。中心軸上の中央道路左右に銀杏の並木を配し、これが育っていく未来へ学生達の成長を併せ望んだ。畳二畳ぐらいの全計画の鳥瞰図は、この中條の願望をかけて描かれ、大巻物軸に仕立てられ、その大画面は完成した。

林毅陸が掲げた「理想的新学園」のグランドデザインは、教育学者小林澄兄によってヨーロッパの新教育運動である「田園家塾」のイメージを重ねられ、その上に建築家中條精一郎がキャンパスの全体像をデザインし、網戸武夫が校舎の設計を手掛けた。新塾長小泉信三はこの計画を形あるものに実現すべく資金集めで全国を東奔西走し、「畳二畳の全計画の鳥瞰図」の中心に、いよいよその最初の校舎が具体的な姿を見せつつあったのである。

《連載》地下壕設備アレコレ【12】水銀整流器

運営委員 山田譲

前回、『元軍令部通信課長の回想』（鮫島素直著）の紹介をしました。原文をそのまま引用したので、かなり取っ付きにくい文章だったとおもいます。当時の言葉づかいは今とは違うし、電気工学の専門家が当時の軍事設備のことを正確に記録しておこうという『回想』ですから、ある程度の知識がないと何だかよくわからないかなとおもいます。ただ私たちのガイドの説明の根拠・出典を、私たちの会としてハッキリさせておくためにはこういう記事も必要だろうと思います。説明の根拠へのこだわりは、やはり大切ですから。

というわけで今回も前回の話の続きで、『回想』のなかに出てきた「水銀整流管」とはなんだろう？というお話です。というより私自身、「水銀整流管」などというものは聞いたこともありませんでした。私は高校のころ真空管式のラジオやアンプを作って遊んでいたのですが、海軍が使っていた受信機やそのための電源設備のイメージはある程度はわかります。しかしこれは初耳です。こんなことにこだわって調べてみようなどと思う物好きは、私以外には絶対いないという“確信”と“自負”で、ちょっと調べてみました。

ところで整流器というのは、交流電気を直流電気に変える機器のことです。そんなものなじみがないと言われるかもしれませんが、携帯電話やパソコンの充電・電源に使うACアダプターにはこの整流器と変圧器が入っています。このACは交流で、DCが直流です。電力会社の供給する電気は交流100ボルトです。これを低電圧の直流電気に変えないと電子機器は動きません。日吉の地下壕でも、照明の電源は交流でも直流でもかまいませんが、通信機器となると交流ではだめです。海軍でよく使われていた短波受信機は92式特改4です。この電源は直流6ボルトと直流220ボルトです。ですから整流器は不可欠です。

この整流器は真空管式ラジオでは半導体であるセレン整流器がよく使われていましたが、日吉の受信室だと30台位の受信機を使うのでかなりの電力が必要です。半導体整流器では間に合いません。それで私は、交流モーターで直流発電機を回す交流直流変換機を日吉では使っていたと考えていました。しかし鮫島氏の『回想』では、この変換機に相当する「電動直流発電機」とともに、「水銀整流管を使う整流器」も海軍では使用したと書かれていました。

それで私は中原図書館で、昭和29年発行の『無線工学ハンドブック』（オーム社）という古い資料を見つけ出し、「水銀整流器」とは何なのかの解説にたどりつきました。それによれば、これは真空管に似ていて、中は真空ではないが水銀蒸気が入っており、電極が2個ついている。片方は電子を放出する部分でカソードと言う。もう片方はこの電子を受け取り吸収する電極でアノードと言う。カソードから放出された電子はアノードの電圧がプラスであれば、アノードに向かって飛んでいくが、マイナスだと飛んで行かない。それで交流電気のプラスの電気だけ流れるというわけで直流になるわけです。日吉でもこの整流器が使われていたかどうかはわかりませんが、可能性は十分ありそうですね。

★活動の記録 2014年7月～8月

7/7 会報発送(慶応高校物理教室)

7/9 第18回戦争遺跡保存全国シボシウム神奈川県川崎大会実行委員会(法政第二高校)

7/12 戦争遺跡保存全国シボシウム神奈川県川崎大会 写真展準備作業

(明治大学平和教育登戸研究所資料館)

7/14 地下壕見学会 横浜夢座 14名

7/16 運営委員会(来往舎205号室)

(写真展示) 平和のための戦争遺跡の保存を求めて 開催

7/16～10/25 (明治大学平和教育登戸研究所資料館 全国大会関連)

7/21 ガイド学習会(菊名フラット)

7/26 定例見学会 36名

7/28 地下壕見学会 綱島東小学校職員・港北区役所 56名

7/31 地下壕見学会 日吉本町西町会 37名

8/2 夏休み見学会 44名 成城学園歴史研究部他

8/4 夏休み見学会 滋賀県教職員組合・ヒヨシエイジ 20名

8/6 夏休み見学会 午前・午後 58名 ヒヨシエイジ・神奈川学園・

もえぎ野中学校・下田小学校はまっ子ふれあいスクール・川崎市教職員組合他

8/9 全国大会実行委員会(明治大学生田キャンパス)

8/15 全国大会準備(明治大学生田キャンパス) 全国ネットワーク運営委員会

8/16～18 第18回戦争遺跡保存全国シボシウム神奈川県川崎大会開催

明治大学生田キャンパスA館校舎 (参加者 延べ人数 962名)

8/16 登戸研究所事前案内 85名・全国ネットワーク会員総会・文化行事・記念講演・基調提案・
地域報告(A館校舎)、全国交流会(柏屋)

8/17 分科会(第1～第3 A館校舎)

8/18 全国大会フィードバック 日吉台地下壕(午前・午後)72名・東部62部隊 23名

東京大空襲と第五福竜丸 18名・多摩地域の戦争遺跡 23名

8/25 地下壕見学会 愛知学院大学後藤ゼミ 21名(慶應義塾休業日のため、地上の見学)

8/30 定例見学会 62名

9/3 運営委員会(来往舎205号室)

9/4 地下壕見学会 練馬三田会 36名

9/5 地下壕見学会 川崎市退職教職員九条の会 15名

9/11 地下壕見学会 セントライフクラブ 24名

予定

9/19 会報117号発送(慶応高校物理教室)

☆地下壕見学会 定例見学会 毎月第4土曜日 13時～(9/27・10/25は締切りました)

11/22・12/13(第2土曜日)・1/24

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで ☎045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: ☎223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会